

慶應二年(1866)以前のおもな海外留学

出国年	渡航先	留学生	その年のおもな出来事	
1862	幕府	オランダ	榎本武揚、西周ら 15 名	攘夷派のテロ激化、薩摩軍上洛
1863	長州	英国	井上馨ら 5 名 (密航)	将軍の上洛、長州藩の攘夷決行
1864	個人	米国	新島襄 (密航)	長州軍の京都侵攻
1865	薩摩	英国	森有礼ら 15 名 (密航)	天皇が通商条約を勅許
この年、他に佐賀藩士ら 3 名英国へ (密航)、幕臣 6 名ロシアへ留学				
1866	薩摩	米国	仁礼景範ら 8 名 (密航)	幕府と長州藩の戦争 徳川慶喜が将軍職後継 翌年(西暦)孝明天皇亡くなる
1866	幕府	英国	中村正直ら 14 名	
1866	個人	米国	横井左平太、大平 (密航)	
この年 5 月、幕府が日本人の海外渡航認可を布告。[以下参考]				
1867	越前	米国	日下部太郎 (三年後死去)	大政奉還。翌年、幕府崩壊。
1870	W.E.グリフィス、米国より教師として招かれ来日。翌年、廃藩置県。			

W.E.グリフィスの赴任に先立って、福井においては藩士日下部太郎の留学がありました。日本近代史上の順序としては、日本人海外留学の前に外国人教師が日本に招かれています。

M.C.ペリー率いる米国艦隊の初来航から二年後(1855)、幕府は長崎に海軍学校を設け、教官としてオランダ海軍士官を雇います。そこで仕込まれた榎本釜次郎武揚たち七人の侍がオランダに向けて出国したのが 1862 年。幕府がオランダに発注した軍艦が完成するまでの間、現地でのさらなる修養を認められたのです。

幕末の留学生にはほぼ共通の抱負がありました。日本には海軍がない。国際社会のことを何も知らない。自ら海外に赴いて知識・技術を修得し、外敵から祖国を守りたい。・五年後に日下部太郎も、同じ思いでアメリカへ渡りました。

オランダで榎本たちの世話を焼いたのは、日本に滞在して教えた経験のあるオランダ人や、その紹介による人々でした。留学の目的は「攘夷」でも、実際の道は国際親善そのものだったといえます。

[近代国家への道]

この時、榎本たち武士に同行して、六人の職人がオランダで造船や機械工学を学んでいます。機械を輸入するだけでなく、自分たちで動かし、さらには自分たちでそれをつくる。そんな新しい人材に必要なのは身分ではなく、知識と技量と強い意志です。

もはや武士だけでは国を守れない。身分制を脱した西洋社会の活力をその目を見た武士自身が、祖国に変革を求めます。日本人がかつて「外夷」と認識した相手を、単に技術の上においてだけでなく、文明上の模範とみなすのに時間はかかりませんでした。

同時期、職務上多様な外国語文献に接していた幕府雇の洋学者**西周**と**津田真道**は、西洋に学ぶべきは国防に直結する自然科学だけではないと痛感し、人文科学を学ぶ留学を希望してオランダ行きを許されます。榎本も化学に熟達する一方、国際法等熱心に学びました。

しかし幕末の武士はまだ現実の身分に縛られていました。榎本たちは幕府海軍士官であればこそ、日本人の出国を禁じ続けている幕府が特別に留学させました。幕府は体制の動揺を自覚すればなおさら、知識・情報の独占的管理に固執します。西は津和野藩、津田は津山藩出身でしたが、学識を認められて幕府の機関に勤める学者官僚ゆえに留学できました。では幕臣でも洋学エリートでもない身分で、祖国を守る狂おしい程の志だけをもってしまった青年が海外にとび出すには・・・。残された道が、密航でした。

【革命のさなかゆえに】

諸藩士の海外留学の先頭を切ったのは、いわゆる「**長州ファイブ**」です。ペリー艦隊来航時に密出国を試みた吉田寅次郎（松陰）の刑死から四年後、祖国を守る海軍を興すため自ら西洋で学びたいという**井上馨**たち三名の願いを理解した藩上層部は、政略上彼らを脱藩者扱いにし、金策にも協力しましたが、君主の許可と当面の**資金**以上に密航において不可欠なのが、現地まで運んでくれる**外国人協力者**です。

伊藤博文たち二名を加えた一行のイギリス渡航にこの時英系の商社があえて手を貸したのは、ビジネス上の打算は当然としても、自国の駐日外交部の承認あってこそです。あえて幕府への背信を犯しても最強硬攘夷派の藩と人脈をつくり、その国際理解を促す事の得失を計算した彼らの動向は、当時の政治情勢の中ではじめて理解されます。

1863年といえば、将軍家茂が上洛して天皇が日本政治の最高権力に返り咲いた年です。松平春嶽、徳川慶喜ら開国派幕府首脳の懸命の説得も空しく、朝廷が攘夷の即時断行を命じ、幕府は表向きそれに従わねばならない、既にそうした政治運営です。そうである以上、もはや在日外国人たちは「幕府＝日本政府」などという認識は捨て去って、多極的政治構造の各所に目を配りながら、激しく流動する日本社会の行方を読むための情報を求めました。西国諸藩の排外主義の強さは十分に認識しながらも、イギリスは決して幕府という現時点の友好的政権とのパイプのみに依存しませんでした。

井上はロンドンに着くまでもなく、寄港した上海で攘夷を捨てます。その目で見た海外の現実に、攘夷の無謀を覚ったのです。藩の上層部が留学を許可したのは、攘夷政策こそ国際派の人材を必要とするという現実的判断からでしたが、現実主義は確実に攘夷思想の基礎を破壊しました。密航で上海を体験した薩摩人五代友厚の建策が、次の隠密留学を生みます。

長州藩士が密航した年にイギリスとの交戦により彼我の実力差を思い知った**薩摩藩**が、その二年後**森有礼**たち**十五名**（他に視察員四名）を一挙イギリスに密航させます。攘夷実

行の報復を体験した長州ともども、両藩は西洋との武力衝突という直接的衝撃だけでなく、密航藩士がもたらすより広く深い情報の影響によって、国際社会の現実を直視する政治構想能力を獲得します。それは、幕府にとって代わりつつその開国政策は継承する、いわば政権交代可能な対抗勢力への変貌を意味しました。それはまたイギリスにとっても、貿易の独占に固執する幕府の存続よりのぞましい新体制だったといえます。十九世紀大英帝国の極東海洋におけるプレゼンスは、幕府とフランスの提携という政治要因を排除した競争の元でならば優位性を発揮できたのであり、薩長両藩とイギリスの接近は必然的でした。

トクガワ・ジャパン 【日本近世からの脱出】

一方、こうした幕府への遠慮を失った御家による後ろ盾を期待しようもない藩に仕える武士が、それでもやむにやまれぬ志を抱えた場合、絶望的なリスクを承知で全く個人による密航に踏み切らねばなりません。**新島襄**のそうした経験が今日に伝わるのは、函館から約一年かけてたどり着いたボストンで明日をも知れぬ身となった彼に、A.ハーディという支援者が奇蹟的に現れたからであり、忘れられた行方不明者のリストに名を連ねなかったこの安中藩士の身の上は、個人密航の一般的な例とはいえません。

横井小楠のふたりの甥**左平太**と**大平**の密航は御家の許可こそありませんでしたが、国元に小楠を慕う支援者があり、さらに長崎で師事した宣教師 **G.F.フルベッキ**の存在がありました。それでも、米国改革派教会伝道局幹部 **J.M.フェリス**たちの個人的善意抜きに、横井兄弟のニューブランズウィックへの道はありませんでした。日本武士の志に感じ無償で手を差し伸べる支援者との現地での出会いという、攘夷なる理念とは対極の現実こそ、彼らよるべなき単独密航者の前途にとり、不可欠にして最も得難い条件だったといえます。

新島や横井が帰国した時、すでに幕府も藩も存在しませんでした。密航留学と維新は同時進行しました。日本をとびだして世界を知りたい。自分が縛られている社会とは別の社会がそこにある。それはまた祖国にも実現できる。誰よりも祖国を思うがゆえ、現状とは違う日本の姿を求めて命を懸ける、密航留学生と革命家の精神は、維新时期という時間において、ぴったりと重なっています。

【新時代到来】

海外に派遣された幕府の留学生が、思わず現地で薩摩人や長州人にでくわします。幕府に対する諸藩の、また諸藩同士の競争意識は密航留学推進の動因として確実にありましたが、異世界のような外国でめぐりあった留学生にとっては、みな日本人の顔をして日本語を話す同胞です。祖国のか弱さと改革の急務である事を痛感する彼らは、維新を待たずしてすでに日本「国民」でした。

幕府がついに日本人の出国認可を解禁したのは **1866年5月**。大政奉還まで一年半です。翌年3月渡米した**日下部太郎**は最も早い認可例であり、ここに密航留学時代が終わります。

解禁された途端にブームが来るのが日本です。これからは洋学の時代だ、海外経験だと、お金とコネのある有力者の子弟が続々と海を越えます。グリフィスが日本に赴任した際になにかと都合がよかったのは、アメリカで彼が教師として学業を助けた日本人生徒の中に、勝海舟の実子小鹿や、宰相岩倉具視のふたりの息子などがいた事です。日下部が客死した1870年だけで四十人近くの日本人留学生が渡米、その前年までに渡航し在留していた学生も二十名以上いましたが、彼ら異郷に学ぶ同胞の交流の中心地がニューブランズウィックでした。五年前に密航した、あの薩摩藩渡英留学組からも大西洋を越えて何人も合流し、日下部と共に学び、彼が亡くなった際グリフィスと共に葬儀や遺品の整理に心を尽くしました。密航者と変わらぬ決死の使命感を持して、結核の病床に学業を手放さず異国の土と果てた日下部太郎の姿は、学問の戦友となった現地同胞とグリフィスに忘れがたい記憶を残したのです。

【忘れられた幕末】

諸藩からの留学が政府公認またその支援による出世コースに変質した以上、能力の平凡な若者たちによる命懸けの覚悟を欠いた学業に伴う実績は、自然ありふれたものにならざるをえません。わずか満十二歳で勝小鹿と同じ船で渡米し、現地で悪意により年季奉公に売られるという、新島とは対極の経験をした**高橋是清**は、その苦境ゆえに抜群の英語力を習得して、後に東京でのグリフィスの日本研究を大いに助けましたが、その一方では数年の滞在に見合う学力向上の全く見られない留学生もざらにいました。

グリフィスが東京の開成学校で教鞭をとっていた1873年（明治6）末、日本政府は財政事情からも官費留学生を一旦全て帰国させると決めます。帰国者に対する試験の結果、留学の成果のなさは歴然、その多くがただの外国見物また西洋かぶれの類と判断されました。外国で専門教育を受けられるレベルの学生はほとんどいない以上、国内での基礎教育に注力すべきとされ、当面お雇い外国人教師がその任を期待されました。

グリフィスは帰国し、翌1875年、開成学校で最も優秀だった**鳩山和夫**や**小村寿太郎**が、文部省が派遣する最初の留学生として、専門教育を受けるため渡米しました。次年度には**穂積陳重**や**櫻井錠二**、**杉浦重剛**たちが英国に渡りました。彼らはグリフィスが東京で情熱を傾けて指導した生徒たちでした。それから十年、高等教育を担える日本人教師が育つとともに高給取りの外国人教師は不要とされ、一斉に解雇が進みます。一般に近代日本のエリートは、外国出身者以上に自国の西洋化に積極的で無遠慮でした。

身分に縛られ出国を禁じられた旧幕時代、それを破壊した維新の日々が遠い過去となるにつれ、誰よりも「日本人」であろうとして国際化の先頭に立った無謀で気高い青年たちの経験は忘れられていきました。その最初のひとり榎本武揚が最後の幕臣として五稜郭まで戦い抜いた後、祖国のために尽くした後半生が後世真つ当に評価されてきたとは言い難い事実、藩閥意識に囚われたまま西洋の背中を追い続け、また江戸を懐旧している近代日本人の姿が重なります。